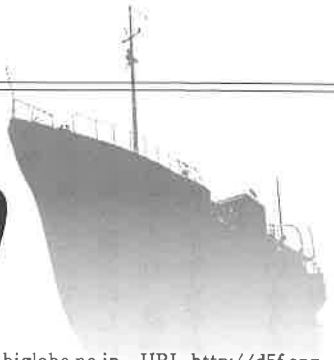


2015.07.01  
No.388  
(7・8月号)

# 福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



訪問する生徒に質問攻めのボランティア、2階のデッキまで据わり講話を聴く、エンジンの歴史にも興味津々の見学者。



## 核兵器のこと福竜丸のこと

### 知らない人には伝えたい

四月下旬から六月中旬までは、春の修学旅行シーズンです。今年も二〇校の小中学校、高校の見学がありました。元乗組員の大石又七さんも五回ほど講話をおこない、直接の体験者の話に生徒たちの真剣な眼差しが印象的でした。

事前学習を積み、来館してボランティアの説明を聞き、見学をした中学3年生の感想文集が送られてきました。

—この水爆の話を知らない人が増えてきている、多くはこの話をしていきたいと思えます。

—「ビキニ事件」で起きたことが忘れられないように、学んだことを伝えていかなければいけない。

—私は第五福竜丸のことは全く知らなかったです。でも事前学習で聞いた第五福竜丸が忘れられていた時に忘れてはいけな

いど行くことが大切です。

五月二二日、ニューヨークで開催されていたNPT核不拡散条約再検討会議が、最終文書を採択することができずに閉幕しました。

核兵器廃絶を求める国は八割を超える多数です。核の非人道的性に焦点をあて、法的な枠組みとしてクローズアップされてきた核兵器禁止条約への方向。広島・長崎の被爆者をはじめ核開発の被害者の活動、経験を直接共有する重要性。中東非核化構想を前進させるためのとりくみ。保有国は容認できない諸点を力づくで押し切った、との感を強くしました。

生徒たちの素直な感想がいつそう心に響きます。

# 竜の鱗——福竜丸での写真展

新井 卓

第五福竜丸展示館と密にやりとりするようになったのは、二〇一〇年の秋ごろからで、『EXPOSE 死の灰』という展覧会が発端だった。同展は、戦後日本の反核芸術運動をふり返り、現実感を失った日本の現今の〈アート〉とは一線を画す表現を求めて、三軒茶屋のスペース「KEN」主宰・粟津ケンが企画した展覧会である。

二度目に展示館を訪問したおり、〈死の灰〉のサンプルを預かった。〈死の灰〉は、一九五四年三月一日、ビキニ沖で操業中の第五福竜丸と船員たちに降り注いだ放射性降下物だ。現在では放射能は微弱と知っていても、なにか途方もなく穢らわしいもののように感じられ、防湿庫に入れたまま、半年も手がつけられずにいた。

そうしているうちに、翌春を迎えた。三月一日の午下

がり、何気なく〈死の灰〉を持ち出して、近所の公園に出かけた。そろそろ展覧会のための制作に取りかからなければいけない頃だったし、練習のつもりで、小さな銀板で撮影することにした。カメラを三脚にセットして、水辺に歩き出した途端、視界がぐらりと傾き、前のめりによるめいた。一瞬、何かの発作かと思つて青ざめ、それから樹々や街灯が激しく揺れているのを見て、地震だ、と分かった。

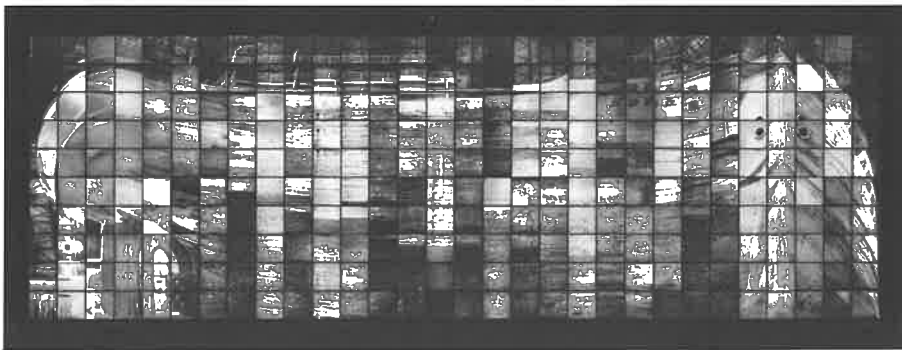
あの日から四年、福島を経て、永遠に消えることのない核のこだまを追う旅が続いている。

二〇一三年の夏、盆前から四週間、都立第五福竜丸展示館に通った。

前の年に、福竜丸の船体を数百枚のダゲレオタイプ銀板写真で分割撮影することを思い立ってから一年あまり、ようやく準備が整い展示館の厚

意で資料室を作業場として使わせていただけることになった。

第五福竜丸展示館は、船の周りを取り囲むようにして建てられた、二枚貝のような形の建物である。船体に沿ってびったりと作られたこの建物にひとたび入ると、船の全体



を引いて見ることはできない。もしこれが飛行機の整備工場のようながらんと置かれた船を自由に見られなら——そんな風に、考えても仕方のないことを考えながら展示館に通ううち、次第に、福竜丸の核心は全体ではなくむしろその表面にあるのではないか、と思うようになった。

毎日、朝一番で展示館に着いて薬品を準備し、一〇枚か一五枚くらいの銀板を磨くと、もう昼どきになっている。外のベンチに座って弁当をひろげていると、目前には夢の島マリーナが見え、そこから切れ切れにハワイアン・ミュージックが聞こえてくる。輝く水面に豪華なクルーザーがひしめいてまぶしい。

マリーナの南端には四角くなにもない水面が広がっている。かつてその場所に第五福竜丸が棄てられていたのだと、元乗組員の大石又七さんに教えていただいた。

夢の島に放置された福竜丸が朽ちようとしていたとき、一通の新聞投稿をきっかけに、市民による保存活動が立

ち上がった。船体は何回かにわたって再塗装が施され、新たに「第五福竜丸」の船名が揮毫された。現在の福竜丸の船体は、舷側から船底に向かうに従って次第に黒ずみ、傷みも激しいように見える。上部は展示館ができてから新しく塗装された部分、中腹は保存運動で塗り直された部分、喫水線から下は元々の表面だから、そこには異なる時間が地層のように露出していることになる。

船を訪れた人々、とりわけ子どもたちはみな船底を触りながら船のまわりをまわっていく。その様子を見ながら、私も、船体を少しずつ触るようにして撮ることができないだろうか、と思った。複製不可能な銀板写真に福竜丸の表面を写しとって、新しいモニユメントをつくること。三〇〇枚の銀板写真は、その初めての試みである（上の写真）。

\*

（あらいたかし・ダゲレオ銀板写真家 本年9月に初の大写真集『MONUMENT S』を刊行予定。）

（写真展の情報は8めん参照）

## 第五福竜丸に「さわる」

視覚障害者の方々との  
触察ワークショップを終えて

真下 弥生

第五福竜丸を視覚障害者の方々と一緒に「触察」する——かねてから実現させたいと思っていたワークショップだった。筆者は仕事の傍ら、障害のある人もない人もともに楽しむ美術教育の活動を行っており、福竜丸の船体が強い存在感で迫ってくるこの展示館は、視覚のみならず、触覚、身体感覚を動員して学ぶにふさわしい場所だと思っていたからだ。

「触察」とは聞きなれない言葉だが、視覚を通しての「観察」に対し、手をはじめとした身体を用い、触覚を通して

物事を把握・分析し、鑑賞する方法と言えるだろうか。当然、目で見ると時間も時間がかかるが、一過性に終わらず、モノとじっくり向き合うことを求められる方法でもある。歴史遺産の保存・次世代への継承を使命とする、博物館の所蔵品に直接手で触れることは、そう簡単に許可を得られることではないが、今回、展示館のご理解をいただき、二〇一五年五月三〇日（土）

に実現の至りとなった。また、展示館には一九八四年、元乗組員の大石又七さんが、視覚障害を持つ生徒が見学に来ることを知って制作された船の三〇分の1模型もあり、以後



船の大きさを「さわる」  
写真・佐々木延江（2枚とも）

三〇年あまり、盲学校等の見学の折に今なお現役で使われている。福竜丸の姿に重層的に迫るための、またとない素材も既にあるのだ。

ふたつの船と向き合う

今回は、大石さんにも展示館にお越しいただき、四名の視覚障害者の方々と一緒に、実際の第五福竜丸と模型とのふたつの船を、対話しながら触察するという流れで実施した。参加者は展示館内に入ると、入り口で船の船尾に触れ、その大きさをひとしきり体感したところで、模型を触察し、船の全体像を構築していく。

模型で最初に手が触れるのは、甲板に載っている漁具の数々だ。参加者と大石さんのやりとりは、その用途を質問することから始まったが、大石さんのていねいな応答につれて、質問の内容は徐々に、福竜丸のたどった道のり、大石さんの経験されたことへとつながっていく。掌から伝わる、モノに刻まれた歲月の痕跡を手掛かりに、触るだけでは知り得ない時代の空気、放射能の脅威に迫っていくやりとりが展開されていった。も

模型の触察、中央は大石さん



はや触察は、視覚を「使えない」人たちへの特別な配慮ではない。ことばでの対話を折り重ね、触察することは、視覚障害者自身にとっても、その場をともにする「晴眼者」にとっても、気づかされることとの連続となる。自分の見ていたはずのこと、知っていたこと、思っていたこと、そして触察してこれで分かったと思っただけを、注意深く再確認する機会でもある。

もっと知りたくなる

大石さんのお話に合わせ、安田・市田両学芸員からも、絶妙なタイミングで補足の説明が挿入されたことも、参加者の興味をいっそう刺激したようだった。触察・対話

は定刻が来ても、終わる気配がなかった。

ワークショップ終了後は、マリナーを見下ろす芝生の上にピクニックマットを広げて、皆で青空ランチと相成った。好天の下でおにぎりを食べながら、ざっくばらんな雰囲気、大石さんへの質疑応答も続いていった。傍らに立つマグロ塚の由来にも触れられると、好奇心旺盛な参加者は、さっそく塚を触察しに走って行った。大石さんはその様子を、最後のひとりが触り終わるまで、終始笑みを浮かべてごらんになっていた。

木造漁船の製作、遠洋漁業のあり様、日本の食生活の変遷、被爆をめぐる人々のまなざし。第五福竜丸は、さまざまな切り口から、私たちがたどってきた過去と現在、そして未来を語ってくれる。可能であれば、またこのような触察ワークショップを、切り口を変えてやってみたいと考えている。既にアイディアを、わくわくしながら練っているところだ。

（ましも やよい/ルーテル学院大学非常勤講師）

連載①

# 晴れた日に 雨の日に

山村茂雄



95年3・1のついで

被爆七〇年の今年一月、第六一回パグウォツシユ会議が長崎で開かれることになっています。パグウォツシユ会議と言えば、小川岩雄さんのお名前がすぐに浮かびます。

◇小川岩雄 原子物理学  
者。一九四三（昭18）年東大理学部卒。終戦まで江田島の海軍兵学校教官。四七年より東大第二工学部（51年より生産技術研究所）の講師、助教。五五年より立教大理学部

助教、教授。江田島で広島原爆の閃光とキノコ雲を見た衝撃から核廃絶運動に向かい。科学者としての運動を貫いた。とくに五七年に開かれたパグウォツシユ科学者会議に叔父の湯川秀樹、朝永振一郎と共に出席、以来この運動に熱心にかかわって来た。『現代日本・朝日人物事典』（90年朝日新聞社刊）に載る小川さんの履歴です。執筆は服部学さん。服部さんが立教大助教となるのは五七年、お二人はともに核廃絶の運動に取り組まれました。

パグウォツシユ会議は、一九五五年のラッセル・アインシュタイン宣言の呼びかけに基つき、五七年七月七日からカナダ東岸の漁村パグウォツシユで開かれました。冷戦下、東西一〇カ国の科学者二人がそれぞれ個人の立場で参加、四日間合宿し話し合い、核時代の科学者の社会的責任を確認したのでした。継続委員会が設置され、以後開催された会議は初回開催地を冠して「パグウォツシユ会議」とよばれます。小川さんは初回の会議参加以後、世界各地で

の会議に、多くは湯川さんとともに出席されてきました。

\* 小川さんが、『福竜丸だより』に「核兵器と科学者」の連載を始めるのは一九九五年一月でした。一二回を予定しましたが、連載は九七年三月まで二七回に及びました。

連載は「科学者の反省と責任」から書き起こされ、前半の「原爆開発の興奮と痛恨」の記述では、原爆投下もたらした結果に痛恨の思いを刻む科学者の姿がリアルに描き出されています。「水爆の開発発と軍備競争の開幕」「ビキニへの道―核兵器大型化の終着駅―」に至る状況へと続き、後半では「ラッセル・アインシュタイン宣言の背景と意義」が詳述され、「パグウォツシユ会議の発足と発展」「成果と課題」へと書き進められています。

この小文のため「連載」を閲覧しました。いまさらに小川さんが、核兵器を「絶対悪」として核廃絶・全面完全軍縮に立ち向かう湯川秀樹博士の「熱意」に対する敬愛の深さを知る思いがしました。

\* 「核大国が核兵器をうずたかく積み上げることよってしか核戦争は防げないという奇妙な論理に各国の指導者ばかりでなくパグウォツシユに連なる科学者の一部までもが捉えられ核軍縮を議論する際でも、核抑止や核均衡を前提とする現実的・技術的議論におぼれかけていく傾向が現に見受けられた」（小川『朝日ジャーナル』75・9・12）状況のなかで、パグウォツシユ会議が、ラッセル・アインシュタイン宣言の初心にかえること、同時に核抑止論の克服に向け、湯川・朝永両博士が働きかけられた努力、日本の科学者の活動が書き込まれています。

\* 一九七五年八月、日本で初めてのパグウォツシユ・シンポジウムが京都で開催されました。「完全核軍縮への新しい構想―科学者・技術者の社会的機能」を主題に一五カ国と一国際組織（WHO）三二人が参加、シンポは「国際的レベルで初めて核抑止論の詳しい分析と批判を試み」「車椅子

子で出席した湯川博士ら日本のグループはもちろん海外からの参加者も挙って核抑止政策の不条理と危険性を鋭く指摘しその克服を訴えた」のでした。被爆三〇年、全参加者は会期中の二夜「広島・長崎の原爆被害調査映画」を見ます。「見終わった参加者の間に声ひとつなかった」小川さんが書いています。

シンポジウム最終日の九月一日には、湯川・朝永両博士によって「私たちは、何よりも第一に核抑止という考え方を捨て、私たちの発想を根本的に転換することが必要である」と指摘した「核抑止を超えて」―湯川・朝永宣言」が発表されています。

\* 一九九五年七月、第四五回パグウォツシユ会議は被爆50年の広島で開かれ、四五カ国から一五二人の科学者が参加しました。この会議では「核兵器のない世界をめざして」を主題としました。「湯川博士らが早くから主張してきた核抑止論の克服の課題が、この会議の総意となったことは

（5めん下につづく）

書評 竹峰誠一郎 著

## 『マーシャル諸島 終わりになき核被害を生きる』から考える

横山正樹

第二次大戦終結後すぐ、米  
国政府は一九四六年から一九  
五八年までの一二年間にわた  
って六七回もの核実験を太平  
洋マーシャル諸島で実施し  
た。五四年三月一日のブラボ  
ー水爆実験は日本で原水爆禁  
止運動の契機となった第五福  
竜丸事件として広く知られ  
る。しかしマーシャル諸島核  
実験被害の全容はいまだ解明  
にほど遠い。本書はその課題  
に迫る最新の大作である。

### 生活誌 vs. 公文書

著者は平和研究者としてマ  
ーシャル諸島各地のコミュニ  
ティーに泊まり込み、生活史  
に着目した現地調査を繰り返



筆者は明星大学教員。  
新泉社刊2600円十税

してきた。住民の声に耳を傾  
け、被害の実相と人びとの開  
きの歴史を丹念に記録した。  
その記録を米国政府の公文書  
類と突き合わせ、被害の程度  
と範囲（地域）の過小評価を  
暴いていく。米・日・マーシ  
ャル諸島等のマスコミや研究  
論文等の膨大な資料も駆使さ  
れ、いくつもの重要な結論が  
導かれる。

### 不可視化された被害

なかでも第二章、〈非認定〉  
地域アイルツク環礁住民被害  
の解明は独自の知見であり、  
貴重な研究成果だ。被害の認  
定と不十分なながらも賠償を受  
ける対象は、核実験地および  
東側（風下）隣接のビキニ・  
エニウエトク・ロンゲラップ・  
ウトリック四環礁の住民にこ  
れまで限定されてきた。一九  
八六年のマーシャル諸島独立  
時には、四環礁の被害補償と  
して一億五〇〇〇万ドルで  
「すべての賠償請求の完全決

着」とされた。だがマーシヤ  
ル諸島政府は「マーシャル諸  
島のすべての環礁が核実験計  
画で放射線被曝していた」と  
いう「確信」をもつ（143  
頁）。米国側の資料もそれを  
十分に裏付ける。しかし再検  
討の動きはない。

これと同じく、第五福竜丸  
以外にも付近で多くの漁船等  
が被曝した事実を元高校教師  
山下正寿らが追跡調査により  
掘り起こしてきたが、日米両  
政府の政治決着は見直され  
ず、追加補償もない。被害を  
視えなくするこうした権力の  
あり方を著者は告発する。著  
者らが提唱するグローバルヒ  
バクシヤとは、核の軍事・商  
業利用両面にわたる被害者た  
ちの総称であるばかりか、被  
害の過小評価を打破し、一九  
四五年アラモゴード（人類最  
初の核爆発地）・広島・長崎  
以来、人類すべてが（濃淡は  
あっても）被ってきたヒバク  
被害の蓄積を可視化し告発す  
る概念でもある。

### 分断ゆるさぬ選択

しかし著者の最大の関心は  
サバイバーとしてのマーシヤ  
ル諸島被災民のあり方に置か

れる。米国「国家の犠牲区域」  
に彼らは組み込まれ、苦難を  
強いられた。だが居住地が分  
かれても散り散りにならず、  
レジリエンス（生存力）を発  
揮した。つまり米国政府相手  
の裁判闘争や国際的な連帯活  
動などを粘り強く展開してき  
たのだ。米国が除染を試みた  
ロンゲラップ環礁再居住計画  
の場合、「帰る・帰らないの  
二者択一ではなく故郷の土地  
がもつ機能をどう取り戻そう  
としているのか、その過程に  
着目すべき」（365頁）と

著者は強調する。つまり、定  
住の可否をめぐる分断を見事  
に回避している。故郷の土地  
という共通価値を中心におき  
地域集団の共同性に依拠して  
ともに生き抜こうとする。そ  
んな彼らの選択を著者は積極  
的に評価するのだ。これはま  
さに被害者たちが暴力克服を  
はかる自力更生努力に他なら  
ない。そして東京電力原発事  
故被害住民の運動にとつても  
示唆するところが多いと考え  
られよう。（よこやま まさ  
き／フェリス女学院大学特任  
教授・平和学）

誠に感慨深い」（連載24）と  
小川さんは記しています。

\*

連載最終回は、しかし、と  
続けるようにして「パグウォ  
ッシユ会議が検討し促進した  
核兵器不拡散条約、部分的核  
実験禁止条約、戦略兵器削減  
条約などは軍備競争の削減や  
緊張の緩和に少なからず貢献  
した。しかし、それらは冷戦  
下で生まれた核抑止論に基づ  
き、米ソなどの核保有を前提  
としており核廃絶の目標とは  
相容れない」と指摘した後、  
次のように書かれています。

「核兵器を必要と考える人  
びとは核兵器国ばかりか私た  
ちの周りにも少なくない。核  
抑止力に国の安全を委ねる政  
権の持続がそれを物語る」。

小川さんの連載から二〇年  
「抑止力に国の安全を委ねる  
政権」は持続し、強化の度合  
いを深めています。

\*

小川岩雄さんは八七年から  
二〇〇五年三月まで平和協会  
理事在任、以後顧問。〇六年  
六月一三日死去、享年八四歳。  
（やまむら しげお／第五福  
竜丸平和協会顧問）

## ニューヨークを行く

—核なき世界への市民行動—

小林秀子

四月二五日から五月三日にかけて「2015年核不拡散条約（NPT）再検討会議」への市民活動に参加した。

思えば二〇一〇年、必ず五年後に参加すると心に決め、ニューヨーク行動以外にも原水爆や被爆に関する何かに取り組みたいと、第五福竜丸展示館のボランティアガイドの仲間に入れていただいた。

署名にこもる願い

ニューヨークでは「核兵器のない世界のための国際行動デーinニューヨーク行動」に参加。午前中はユニオンスクエアにて署名行動、午後からは集会とパレード（右下写真・平和新聞提供）。国連近くの広場には、日本中から海外から633万6205筆の署名が集められた。

核兵器廃絶をめざす署名は六一年前、一九五四年に米国

がビキニ環礁で行った水爆実験で被災した第五福竜丸の事件がきっかけだった。

全国各地で始まった署名は、特に杉並主婦たちの運動は、影響を広げた。その一カ月前に「原爆マグロ」の影響でばったり客足の遠のいた魚商、すし業者の代表が築地市場で開いた大会で「原爆・水爆禁止と被害補償」の署名に乗り出した。その四年前にはストックホルムアピール署名が始まっていた、と中国新聞



署名行動と筆者

ヒロシマ平和メデアセンタの資料を通して知った。現在も第五福竜丸展示館のガラスケースの中に当時の署名が展示されている。何度も目にしてきた署名が今もなお連綿と引き継がれ「核兵器全面禁止のアピール」署名として国連広場に積み上げられたという事実が胸がいっぱいになった。

署名行動では千代紙の折り鶴と第五福竜丸の英語版のリーフレットを配りながら歩いた。道行く人々に「ラッキードラゴン」と言うとなんかいいの人は興味を示し、受け取ってくれる。

核作るのもなくすのも人間ニューヨーク行動から帰って一カ月後に、「ラッキードラゴン」という単語から気になつていた「ベン・シャーン展」を水戸の近代美術館に観に行った。何気なく見ていた

『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』に心を揺さぶられた。キノコ雲のなかに描かれた怪物は醜悪で恐ろしく、彼の目には核兵器が邪悪な「ばけもの」に写っていたのだ。



「久保山さんのことを わすれない」とひとびとはいった。けれど わすれるのをじつと まっている ひとたちもいる。

ひとびとは 原水爆をなくそうと 動きだした。けれど あたらしい 原水爆を つくって いつか つかおうと かんがえる ひとたちもいる。」

アーサー・ビナードの文もまた、私たちに訴える。原水爆の恐ろしさを。核兵器を作るのもなくすのも私たち人間であると。

原水爆なくす歴史はつづく「核兵器いらない女性の交

流会inニューヨーク」にも参加した。サリー・ジョーンズさんは「核兵器廃絶のビジョンは全世界の大多数の声です」と。バーニー・バロースさんの「核兵器廃絶は」分別を持つ必要はない。丁寧である必要もない。今、世界の邪悪なものに立ち向かうとき」の発言に大きな励ましをもらった。

ニューヨーク行動に参加して、うやむやにしていたこと、全く知らなかったこと、表面だけで知っていると思い込んでいたことがたくさんあった。今更ながら「学ぶことは楽しい」のだと実感した。

五月二二日、第九回核不拡散条約（NPT）再検討会議は最終文書採択できずに閉幕した。採択できなかったのは残念だが、原水爆をなくするという歴史はこれで終わりではなく、まだまだ続く。

私は二〇二〇年核不拡散条約（NPT）再検討会議ニューヨーク行動に向けて動き出そうと考えている。歴史を終わらせないために。

（こばやし ひでこ／第五福竜丸展示館ボランティアの会）

## ラッセル = アインシュ タイン宣言 60 年 特別展示から

一九五五年七月九日、パトランド・ラッセルが発表した「宣言」は、核兵器のない世界の実現を、そのためには戦争の根絶もめざすべきである、という内容で大きな影響をおよぼしました。

今回の展示は、「宣言」が誕生するきっかけとなった第五福竜丸の被ばく、ビキニ事件と巨大な威力を持つ水爆の時代を概観しながら、今日の核問題を考え、「宣言」を今に活かすために「ヒト」として考えてみよう、との企画です。

展示バナー1（みんなで生き残ろう）……導入の展示では、いまも一万六千発の核兵器が

世界にあること、繰り返されてきた核実験の表を示し、「人類に終末をもたらすか、それとも人類が戦争を放棄するか？」と問いかけます。

展示バナー2（宣言がよびかけられた その時代とは？）……アジアで二千万、世界で五千万の犠牲を生みだした第二次世界大戦とその後の世界を概観し、米ソによる核軍拡のエスカレーション、その極致としての水爆へ：「宣言」が発信された時代をたどりま

す。

展示バナー3（水爆戦争で人類は死滅！それは防げるのか？）……水爆とはいかなる



ものか、ブラボー水爆(15Mt)、ソ連のツァーリー・ボンバー(50Mt)とグローバル・フオールアウトを解説します。

展示バナー4（宣言はどのよう

に生まれたのか？）……第五福竜丸の被ばく、水爆の脅威と立ち向かった日本の科学者、その分析からジョセフ・

ロートプラットフォームの構造を分析しその脅威をラッセルに伝えました。ラッセルによる、人類を水爆死から防ぐためのよびかけ

「宣言」の構想についてアインシュタインは、即座に賛意を示し、彼自身の最後の社会的行為となりました。「宣言」は、湯川秀樹をはじめ一

一名の科学者の署名により発表されました。

この呼びかけをうけて一九五七年、カナダのバグウォッシュで国や体制の違いを越えた国際的な科学者の会議が実現します。バグウォッシュ会議は、今年一月には長崎で開催されます。

〈特別展示は8月末まで〉

## ◆ ◆ ホームページをリニューアル ◆ ◆

第五福竜丸展示館のホームページをこれまでのものから一新し、より利用しやすいものに改めました。従来のページは2002年に製作し、これまで40万を超えるアクセスを頂きました。10年を経て掲載情報の更新が必要となったためこの度リニューアルすることになりました。

新しいホームページは、トップに展示館外観や館内、船体など展示館の様子の分かる写真をスライドショーで表示し、動きのある頁となっています。また、展示館の近況やイベント情報などの最新情報を取得しやすい表示に改め、ソーシャルサイトへ共有しやすいよう工夫しました。

来館する子どもたちの事前学習の材料としても利用できるように第五福竜丸やビキニ事件に関する基礎的な情報を掲載しました。また、日頃事務局にくる問合せや来館者の意見を反映し、団体見学の案内や館へのアクセス、貸出用パネルセットの案内などの項目を充実させました。

今回のリニューアルでは新たに、

寄付や賛助会費の受付をウェブ上で決済できる仕組みを採用しました。第五福竜丸平和協会が発行した書籍の一部もウェブ上で購入することができます。より広くビキニ事件や福竜丸を知っていただき、またより多くの方に福竜丸の航海に参加してもらうため新たなホームページを活用していきたいと考えています。



新ホームページの公開は7月中を予定しています。URLは現行のホームページと同様です。また、日本語版の公開後に英語版も作成する予定です。ぜひ皆さまの率直なご感想をお聞かせください。

### 核実験に抗議した船 ゴールデン・ルール号の再生

核実験に対する非暴力の抗議行動を行ったヨット、ゴールデン・ルール号がアメリカの「平和のための退役軍人の会（ベテランズ・フォー・ピース、VFP）」により修復され6月20日にカリフォルニアで進水式が行われました。

1958年、非暴力を信条とし核軍備拡大に反対する船員たちはマーシャル諸島でのアメリカの核実験に抗議し、実験海域への侵入を計画しました。ゴールデン・ルール号は連邦裁判所による航行禁止命令を無視し出航しますが拿捕され乗組員は拘束されました。この行動は核実験に対する世論を喚起し、核実験禁止へと向かう流れの一つとなりました。

ゴールデン・ルール号はその後所有者を替えカリフォルニア北部ユリーカのボートヤードに係留されましたが、劣化により沈下。2010年からVFPにより修繕が開始され、記念式典がもたれました。第五福竜丸平和協会は、核実験に対する非暴力の抗議船復活を祝い、航海の無事と核なき世界の実現を願う祝辞を送りました。

これに対し、退役軍人の会から感謝の言葉と、いつかゴールデン・ルール号で第五福竜丸展示館を訪れたいとい

うメッセージが届きました。



退役軍人の会は、人類史上初の核爆発が引き起こされてから70年となる7月16日にゴールデン・ルール号の修復後最初の航海を計画しています。

### 平和への歩み今夏も

今年も夢の島の第五福竜丸展示館前から8月の広島に向けてたくさんの人たちが歩きます。

5月6日国民平和大行進出発式には800人以上が集い、川崎昭一郎平和協会代表理事が、昨年のビキニ被災60年に多くの方からご支援をいただいたことへのお礼とともに、ニューヨークで開催中だったNPT再検討会議に参加した代表団を激励しました。

また日本山妙法寺の平和行脚は6月6日に出発し、木津上人から「微力ではあるが非暴力でさまざまな立場の人たちとつながり、世界の子どもたちを守るために歩きましょう」との挨拶があり、安田和也事務局長が展示館を案内しました。今夏も反核マラソン

やピースサイクルなど、平和の取り組みが続きます。

### 定時評議員会開く

公益財団法人第五福竜丸平和協会は5月24日、学士会館にて定時評議員会を開きました。議長には岩垂弘評議員が選出され、川崎昭一郎代表理事より平成26年度の事業報告ならびに決算報告が行われ、質疑討論の上承認されました。

続いて、任期満了に伴う理事の改選について、代表理事より提出された下記の次期理事候補者5名の一人ひとりについて慎重審議した結果、全会一致で承認されました。

再選された理事は、奥山修平、川口重雄、川崎昭一郎、坂野直子、山本義彦の各氏です。

評議員会に続いて開催された理事会において川崎昭一郎理事が代表理事に再選されました。

### 平成26年度正味財産増減計算書 単位(円)

経常収益(合計)	28,811,653
基本財産運用収益	1,875
事業活動収益	25,154,947
受取会費	1,843,000
受取寄付金	1,769,007
雑収益	42,824
経常費用(合計)	24,761,961
事業費(計)	23,125,516
公益目的事業 (展示保存・資料収集・普及広報)	21,466,646
その他の事業 (出版物・記念品頒布)	1,658,870
管理費	1,636,445
当期経常増減額	4,049,692
当期在庫高増減額	△ 678,407
当期一般正味財産増減額	3,371,285
一般正味財産期首残高	23,311,556
一般正味財産期末残高	26,682,841
正味財産期末残高	26,682,841

### 新井卓ダゲレオ写真展=7月16日~10月12日 「竜の鱗—アトミック・エイジのモニュメント」 関連企画 (2めん参照)

アーティストトーク

「モニュメント／非モニュメント 核をめぐる記憶の縁」<sup>よすが</sup>

8月15日(土)午後

新井卓(写真家)×竹田信平(アーティスト・映像作家)

参加無料

### 第五福竜丸コンサート

10月10日(土)午後5時開演

高橋悠治(ピアノ) 戸島さや野(ヴァイオリン)

全席指定 2500円(学生1000円)